



TITLE:

<批評・紹介>韃靼漂流記の研究
園田一龜著

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

CITATION:

三田村, 泰助. <批評・紹介>韃靼漂流記の研究 園田一龜著. 東洋史研究
1939, 5(1): 71-74

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145659>

RIGHT:

説明さるゝに當つても、常に歐洲のそれに比較せられ、又廣く世界の戰史に據つて説明を施こされる。而もそれは一々根本的史料に據られて居り、その研究は徹底的であり、判斷は明快にして鐵則の如く、我々の視野は一層の廣みを加へられる。我々の大いに學ぶべき點である。

凡そ支那の文獻は最も豊富にして而もその記述の方法は多く非科學的である。されば複雑多岐なる支那の文獻を整理し、之を系統立てんがためには一の標準を立つるにあらずんば、文獻に拘束されて支離滅裂となる危険性が多いのであるが、その標準として地理を用ふることが、一つの有効なる方法であることは博士のこの書に最もよく示されてゐる。嘗て滿鮮歴史地理研究報告が斯界の最高權威として世に送られたころ、この地理的方面の研究に主力が注がれた様であるが、その後はその反動として地理的方面のことが不當に輕視されてゐる傾向がないでもない。言ふまでもなく地理の研究も單なる地名の考證とか、地理書の文獻學的研究に終つてはならないが、この書に於て模範的に示されたるが如き方法によつて、地理に即して歴史を考へるならば、歴史の理解と整理にどれだけ役立つか解らない。この意味に於て博士も第一に推薦せらるゝところの讀史方輿紀要の如き先人の尊き業績はもつと利用されて然るべきであらう。

今や大陸の經營は着々として進行しつゝあり、我が國人の關心は大陸に集注されてゐる。今こそ東洋史の學徒はその研究を現實と結びつけ、東亞新秩序形成の礎石ともなすべき秋である。而してその現實との結合の地盤として地理をもつことが最も有効適切なる方法であらう。それにつけても、博士が「日本の學者で多少漢文の素養のあるものにも支那の材料を科學的に使ひこなし得ない理由がある。それは我々の學んだ所の漢文の教科書たる經史子集の四部共に之を教へる學者すらその文句に含まれた現實的意義を解釋し得ぬ所が多く、唯だ文字の解釋だけで既に一生を費すに足り、活眼を開いて活書を讀む方針を學生に吹き込み得ない。従つて現在の高等教育を受けた科學者に指を鼎に染めしめる様に導き得ないのも敢て怪しむに足らぬ。」と警告されたことは我々のとくと服膺すべきところであらう。限られた紙數の中にこの内容豊富な書を紹介せんとして筆及ばず、紹介の宜しきを得なかつたことを恐れつゝ、東洋史を學ぶ者に限らず、廣く一般人士に必讀の讀物としてこの書を推薦するものである。(北山康夫)

蹇袒漂流記の研究

園田 一 龜 著

康德六年七月二十五日南滿洲鐵道株式會社鐵道
總局庶務課發行、菊判三二八頁、圖版一四葉

著者園田氏は多年蹇袒漂流記を研究され、その成果は既に奉

天圖書館叢刊中に「縫輯漂流記研究」「再び縫輯漂流記に就いて」と題して發表されてゐる。今回同じ題目を以て堂々三百餘頁の大著をものされ、漂流記研究の金字塔を築き上げられたかに見える。簡単な漂流記録からよくもこのやうな大研究が出来たものと感心させられた。

縫輯漂流記の原本に就ては、前に北京の橋川時雄氏がこの漂流記と異名同本なる「異國物語」を影印された當時、既に本誌上で紹介したから、こゝでは園田氏の研究の方のみに觸れることにする。

本書は章を分つこと五、曰く第一章序題、第二章縫輯國漂流の顛末、第三章燕京生活の一年、第四章漂流人の送還、第五章漂流人の日本生還。大體漂流記の書誌的な研究、漂流事件の顛末の説明、漂流記に現はれる人物・史實の考證から成つてゐる。而してそれらは何れも著者の趣味感興によつて取捨鹽梅されたもので、漂流記の研究と題してはゐるが、全書の構成は謂はゞ歴史隨筆といった態のもので、この研究によつて著者の日頃抱懷する歴史體系とか歴史を學ぶ意義を説明するといった堅苦しいものではないから、私も持ち合はせの僅かな知識を基にして、気軽に思ひつきを書きつらねようと思ふ。

先づ研究としては第一章と第四章の後半及び第五章に本書の特色が存する様だ。第一章に於ては從來傳はつて居る漂流記の

異本と先人の研究とが克明に收録説明されて居つて、その無類の克明さに特色を認められるが、結論としては大體橋川氏の業績の範圍を出て居ないかに見受ける。第四・第五章では李朝實錄・典密司臚錄・承政院日記等の朝鮮史料、日韓書契・竹内家の墓碑・過去帳等の内地側の新史料を豊かに使用された點が注意され、それ等によつて漂流人の日本歸還その他の所謂後日物語が遺憾なく描寫されて居る。(第二・第三章は著者が嘗て發表されたものと骨子は變つて居ないと思ふ。)

内容に就て注意される點は以上の如くであるが、本書の更に大なる特色ともいふべきは、著者の流麗達意の文章と、一つの物語を巧みに纏め上げた手際である。その結果讀物としてなかなか面白く讀めることで、この事は極めて高く評價さるべきだ。從來東洋史關係の研究として世に出たものゝ中、お話として讀んで面白かつたといふのは甚だ稀で、大抵無味乾燥な考證の羅列であつたり、低級な理論をことさらに高級な詞で晦澁にして見たり、内容がこなれてゐない爲に遂に何が書いてあるか分らなかつたといふ態のものが多いやうに見受ける。その點本書の出現は誠に心持よい。

唯だ、例の揚足取りになるが、史實の考證の方では、遺憾に思はれる點が無いではない。以下私の氣づいたものを二三擧げて置かう。

先づ遭難の場所と下手人の章で、著者の論證は少しく不十分の様に思はれる。即ち氏は李朝實錄に「也春住胡得春來。言于慶興府使金汝水曰。所乙古等胡人百餘」云々とあるを引き、下手人は所乙古等の胡人なりと斷定されながら、この「所乙古」には一言も觸れることなく、専ら「也春」の方のみに注意を向けられ、この語が慶興府の對岸豆滿江左岸一帯の地の總稱なることを説かれたまゝ、その後何の考證もなくいきなり下手人は東海ワルカ人なりと述べられて居る。それで若し私が勝手に氏の論を補足するならば、遭難地は也春地方で下手人は也春の胡といふ事になる。之では折角の實錄の記事が死んでしまふので結局所乙古が何處に當るかを解決せねば依然遭難地及び下手人の手がよりは判明すまい。況や也春は朝鮮語の當字だから氏の考證の仕方も不十分だ。内藤先生は所乙古を朝鮮音バルク（所乙古はソウルクだが「所」がバ（バ）音を寫す事は、光海君日記に洪巴圖魯を弘所土里とせる例により分る）とし、ブルハト河流域居住の女眞人に該當するならんと云はれた。これは一つの提案として考へ得られるだらう。兎に角一工夫要る所だ。

次に漂流人の通過路の所であるが、漂流記には遭難地より三十五日目に大なる都に着いたとより書いてないので、氏は元明時代の交通路は恐らく一定ならんと推定され、現今の地圖を案じて也春屯より奉天迄を約千五百九十一里とし、一日五十里と

して三十二日目に着くと推論の上に推論を重ねて居られる。如何なる手續で千五百九十一里になり、如何なる理由で一日五十里になつたか、その歴史的根據は極めて不明瞭だし、一體氏の論の進め方は少しく亂暴だ。この様にして行けば苦心して史料を採る必要もなくなる譯である。北路記略の江北雜記の條に朔方記といふ書が引かれて居て、それに北京から珲春迄の里程と所要日數が載つて居る。即ち自北京至山海關爲七百里。自關至瀋陽七百里。烏喇七百里。吾手所里五百里。寧古塔三百里。珲春五百里。合三千四百里。騎馬往來則四十日。倍途則二十日。清市時聞之珲春人曰自珲春至皇城三千八百多里。烏喇・寧古塔に行くのは穩城鎮城より越邊するとある事によつてこの種の問題に對する大體のメドがつく。先づこゝら邊から論を進めるべきものと思ふ。この種の問題に朝鮮側史料の不可缺なる事はこれによつても分るといへようか。

次にハトロワズ考である。この項は漂流記の人物評の中でも異彩を放つて居る所で、ハトロワズを誰に當てるかといふ事に就いては、昔から意見が出て居て、園田氏も大いに考證を試みられて居る。ハトロワズが禮親王でない事は園田氏と共に異議なき所である。内藤先生は太祖の八子英親王阿濟格を、泉・橋川兩氏は鄭親王濟爾哈朗を當てられたが、悉く園田氏の擊破する所となり、氏自らは阿巴泰を擁立して、これこそ當人

ならんと的確信を披瀝された。そこで私も異を樹てんと思ひ、貧しき篋底を探つた結果、偶然にも畏友田川氏の惠投に係る魯庵文集を見つける事によつて簡単に解決出來た。魯庵文集には戊寅年即ち清の太宗の崇德三年正月朝鮮の崔鳴吉が王世子に従つて太宗に謁見した記事がある。その中の八王の條に注して、「名阿之舉。前汗之子今汗之弟也。國人謂之破土里。破土里者雄勇之稱」と記して居る。言ふ迄もなく阿之舉は阿濟格^{ahjige}。前汗はヌルハチ、破土里は batutu の對音であるが、これによつてハトロワンスは英親王阿濟格に當る事になり、どうやら内藤先生の説が正しい様に思へる。

尙漂流記に順治帝を「韃靼惣王名はチャウテン」と書いて居る事や清廷主要人物の描寫の記事を讀むと、制度文物の上で非常な勢で支那にかぶれつゝあつたかに見える當時、内部にあつては尙舊態依然たる滿洲人の顔がのぞいて居る様に思へて、私には興味があるが、これは園田氏とは又別な方向からも觀察出來るといふだけで、書評には餘り關係がなさうだ。その他問題の滿洲語に就いても何か述べるべきだが、私は専門家でないからこれには觸れない方が賢明である。

以上私の氣づいた所を漫然のべて拙筆させて頂く。終りに園田氏は漂流記に就いての氏と内藤先生との關係を述べられ、感慨の情に耽つて居られるが、私にもこの漂流記に就いては思出

があつて、私の瓶原滞在當時故先生が君にオモチヤをやらうといつて出されたのがこの漂流記で、爾來先生から教へて頂く都度纏めて見るつもりをしてゐたが、僅かに校勘記を作つただけで永く中絶してしまつた。更に私は昨秋漂流記發生の故地たる三國新保の海岸で兵として猛訓練を受けた事等もあつて、一入感慨深いものがある。因縁話に終つて申譯ないが、永い間の練習不足をおして書評を引受けた所以でもある。(三田村泰助)

Mongol Invasion of Poland in The Thirteenth Century

by

Shinobu Iwamura

(The Memoirs of the Research
Department of the Toyo Bunko,
No. 10, 1938. pp.103—57)

前ポーランド駐劄公使伊藤述史博士が、同國の中世古文書を持ち歸られ、その蒙古侵入に關するものを發表されるといふことを、かねて聞いてゐて、久しく待望してゐたところ、いま岩村忍氏の手によつて英文でこれが公けにされた。

全編五五頁、文書の英譯とラテン原文との外に、ドーン、ハンマー・ブルグスタル、ヴォルフ、ブレトシュナイデルなどの諸權威の説に、この文書から知られたところを織りまぜて、